

「ちぎり」(楔状の木材)を埋め込んで亀裂を縫い合わせるように塞いでいる修理箇所が確認され、これまでにも度々、床漆の補修が行われていたことがわかりました。今回の阿弥陀堂内陣床塗装工



←「ちぎり」を埋め込む作業の様子

↓「ちぎり」で塞がれた亀裂  
過去にも同様の補修を行った形跡がみられます



事では、劣化した古い漆の仕上層を一旦研ぎ落としてから、漆を塗り直します。ただし、床材に傷や亀裂が生じている箇所は、下地の漆に至るまで研ぎ落とし、床材の損傷部分を修復した後、再び下地から漆を塗り直す作業が必要となります。大きく亀裂が生じている部分には、「埋木」(欠けている部分に同材で目を合わせるにあてがい、欠損部分を補足します。また、床下からは、一部で板と板の継ぎ目に再建時から取り付けられていた「掴み蟻」(継ぎ目に垂直に取り付ける木材)を復旧し、離れないように緊結します。また、曲線状に割れている部分については、過去に行われていた補修と同様に、檜の「ちぎり」を埋め込み、亀裂を縫い合わせるように塞ぎます。床材の修復を終えたら、木地の調整作業に移ります。木地の調整作業では、漆を塗り込んで木地面を補強する「木地固め」、漆を埋め込んで木地面の細かな凸凹を平



内陣本間を縦断する大きな亀裂には檜板で「埋木」します



敷居は一部、下地作業が始められています

坦にする「刻苧」といった工程があります。この内「刻苧」は十日以上の日数をかけて丁寧な乾燥させます。なお、明治の漆は、下地の木目が透けて見える透漆であるため、中塗を濃茶に色付けした上に透明な漆を塗ることで、明治の漆の風合いに近いようにします。また、今回の工事では、床面(漆面)に生じる亀裂への対策として、御影堂内陣床の修復工事と同様に、予め床面に目地(切れ込み)

を入れておく方法が検討されています。乾燥等による床材の変形は、今後も必ず発生します。しかし、床面に予め目地を入れておくことで、意図しない箇所に乱雑に亀裂が生じるのではなく、その目地に沿って亀裂が生じるよう発生箇所を制御しやすくなり、補修も容易になります。これにより、床面(漆面)は、長期的な安全性が向上し、外観上も傷みが目立ちにくくなること期待できます。



# 御修復のあゆみ

伝承された先達の願い

## 阿弥陀堂内陣床漆塗装工事が進む



阿弥陀堂内陣での作業の様子

阿弥陀堂内陣本間の床は、檜の板を床材として用い、その上に何層にも透明な漆を塗り重ねることによって、美しく艶のある床に仕上げられていました。御修復にあたって現在の破損状況を確認したところ、全面にわたって経年劣化による漆の剥離や損傷が見られ、下地の漆までが完全に剥がれ落ちて床材の木地が露出している箇所も多く見受けられました。これに加えて、床材自体にも損傷があることが確認され、温度の変化や床の上の荷重の変化等によって、床材が変形することで発生した亀裂が複数箇所に見られ、箇所によっては床下の地面が見えるほどの大きな深い亀裂も生じていました。なお、修復の過程で古い漆を研

### 阿弥陀堂内陣床漆塗損傷状況

- 凡例
- ① 下地損傷
  - ② 中塗損傷
  - ③ 仕上損傷
- 漆塗は下から①～③の順の構造になっています。

